

◆ 2023 年 度 活 動 報 告 シ ー ト ◆

団体名：ファーム・インさぎ山

26A-02

代表者：会長 萩原 さとみ

URL : <http://farmin-sagiyama.com>

1. 活動が必要とされた状況

当団体が耕作している水田地域は見沼田んぼと呼ばれ、もとは沼であった地帯であり、江戸時代による干拓事業によって田んぼができるようになったという歴史を持つ。

環境保全型農業として田んぼを耕作する場合に大きな負担がかかる作業の一つに畦草刈りがある。例年2週間に1回程の割合で畦草刈りを行い管理してきた。草刈りの間隔を短くすることによって草丈が低い状態での刈り取りをすることができ、体への負担を軽くすることができる。しかし昨今の異常気象により、6月からの高い気温の中、畦草刈りを行うことは常に熱中症と隣り合わせの作業となってしまった。畦草刈りの頻度を落とすとその分の草丈が成長してしまい、草刈りの負担が大きくなってしまう。また、今後増える水田の面積を考えると、作業員の体力を使わずに省力化することが必要になってきた。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

3月から9月において毎月第2日曜日の午後に参加者を募って活動を行った。機械での作業ということもあり主に大人が行った。



3. 活動の成果

想定していた通り、畦草を高く刈り取ったことにより、生き物の居場所を確保することができた。今年は7月に雨が降らないといった異常気象に見舞われたが、田んぼ周辺に生息する生き物への影響は高く刈った畦草の存在で少なかったように感じる。例年では畦草を地面から刈っていたため、切り倒した当初は生き物が影に隠れることができたが、数日のうちに草が乾燥して影がなくなってしまうと、生き物の姿は無くなってしまっていた。

作業員の負担を軽くすることができた。今まで使っていた肩掛け式の草刈機では重さや排気ガスによる負担が大きかったが、歩行型の草刈機では心肺や呼吸に負担をかけることなく作業ができるようになった。

4. 今後に残された課題

年々耕作する田んぼが増えていく。もし当方が請け負わなかったらどうなるだろうと考える。強い除草剤を散布し、慣行農業として生き物に配慮のない栽培になってしまうことが予見されてしまう。当方は、長い年月をかけて環境保全型農業を進め、生き物と共生し、自然への影響が少なく、働く者が負担の少ない運営を目指してきた。段階的な機械化を行い、省力化をしてきたおかげで、規模拡大の余地も残している。しかしながら、規模が増えることによって、人海戦術としての農業体験により行ってきた「田の草とり」「堆肥の散布」の作業が間に合わなくなってきた。今後は、それらを省力するための機械化を目指し、また、更なる作業管理の改善をして、健全な田んぼを作っていくたい。